

遊女評判記の書き手と読み手

——延宝期前後の吉原物を主として

Authors and Readers of *Yujo hyoban-ki* (prostitute reputation books):

Yujo hyoban-ki for *Yoshiwara* (red-light district in Edo)

around the 1660s to 1680s

高木まどか

キーワード：遊女，遊女評判記，遊客，吉原遊廓，日本近世史

〈Abstract〉

Yujo hyoban-ki (prostitute reputation books) generally refer to books written in the Edo period, which have an introduction to *Yukaku* (red-light district) and mainly assess the appearance, temperament and entertainment skill of the courtesans. The *Yujo hyoban-ki* are guidebooks for male patrons who enjoy *Yukaku*. These guidebooks could be considered the predecessors of “*Yoshiwara Saiken*” known as guidebooks on *Yoshiwara* (red-light district in Edo). However, the role of a guidebook is only one aspect of *Yujo hyoban-ki*. In fact, *Yujo hyoban-ki* contain many miscellaneous items including not only guidance for readers but also descriptions written for the authors’ enjoyment, prostitutes, and the authors’ friends, among other possible audiences. From the contents, we can infer that the male patrons and the prostitutes around the authors were probably involved when the authors wrote *Yujo hyoban-ki*. That is, *Yujo hyoban-ki* were interactive books in which the readers participated and not just books unilaterally

created by the writers. Although at first glance, *Yujo hyoban-ki* appear to contain numerous insignificant anecdotes, those anecdotes are valuable records that convey the actual situation of the authors, male patrons and prostitutes in the *Yukaku* during the Edo period.

However, *Yujo hyoban-ki* were often underestimated as “vulgar material without historical value” and have not been evaluated in previous research from the perspective of their contributions. In this paper, I evaluate the usefulness of the *Yujo hyoban-ki* as historical materials by clarifying the relationships among the authors, prostitutes and male patrons in the *Yukaku* based on the descriptions in *Yujo hyoban-ki*. For this purpose, I will use *Yujo hyoban-ki* for *Yoshiwara* around the 1660s to the 1680s, which contain numerous miscellaneous descriptions, as the primary historical materials.

目次

はじめに

第一章 遊女評判記の変遷と延宝期の特色

第一節 遊女評判記の変遷

第二節 延宝期評判物の特色と評価

第二章 評判物の書き手・読み手・遊女

第一節 複数人の書き手と客からの情報提供

第二節 遊女と作者の関わり

おわりに

はじめに

遊女評判記とは一般的に、遊里の案内、及び主として高級遊女の容色・氣質・才芸などの評を記した江戸時代における書を指す^(一)。すなわち遊廓で遊ぶ客のためのガイドブックであり、吉原案内として知られる「吉原細見」の前身とも言える。客が遊女評判記を携え廓に足を運んだ様子は史料にもみえ^(二)、またこうした案内は宣伝としての意味も兼ねていたことが指摘され

ている^(三)。

しかしこうした遊女評判記に関する一般的な説明は、あくまで遊女評判記の一面を示すに過ぎない。事実遊女評判記には、案内記というにはあまりに雑多な内容が含まれている。たとえば寛文七年（一六六七）頃の遊女評判記『吉原讚嘲記時之太鼓』の作者「吹上氏かわずのすけ安方」は、同書を客の案内をする「太鼓もち」の代わりになる草子として刊行したと述べるが^(四)、そこには案内の助けになるとは到底思われないような記述が散見される。その最たる例は、吉原角丁権左衛門内の遊女「みはる」評における次のような話である。すなわち、「みはる」はまだ若いながら気高く美しい遊女であったが、作者吹上氏はある時この「みはる」の道中姿に一目惚れし、すぐさま遊女の目付役である遣手に「みはる」の暇を尋ねた。今月中には会えないと言われたが、作者は「今夜もし客が早く帰れば言葉が交わせるかもしれない」と諦めきれずに夜を更かし、待ちくたびれて見世の格子の際で伏せていた。するとそれを辻番に盗人と間違われ、鉄棒で散々に叩かれて「ちめだま」（血目玉）を回したという^(五)。

もし同書が真に案内を目的として著されたのであれば、この話中で必要な情報は「みはる」が予約で埋まっているという点であろう。したがって後半は「案内記」としては蛇足であろうが、小野晋によると、こうした記述は「自分が如何に通り者であるかをむしろほこっている」「つまり作者の「通り者」自慢であるという。すなわち如何に作者が廓に精通しているかを得意がっているのであり、それによって作者が嘲笑をかうことなど別段意に介されていないのだという^(六)。また「通り者」を自認する作者たちの関心は他の客にも向かっていたとみえ、遊女を批評する記述中には多々作者以外の客の行状も、事細かに挙げつらわれている。こうした記述は一見取るに足らない小話のようでもあるが、遊廓における作者や客の実態を知るためには貴重な記録である。

遊女評判記はこれまで多くの場合、井原西鶴以降の文学の発生とどう関わったかという文脈の中で検討が重ねられてきた^(七)。したがって、先行研究において遊女評判記そのものを積極的に評価する視点は乏しい。肯定的に述べられる点を挙げるとすれば、それは当時

の現実に照準を向けた史料であるという点であろう。たとえば、次は小野が遊女評判記の性格を批評した一文である。

それは正しい意味における伝記文学でもなければ、人物批評とも称し難い低俗専一なものであった。しかし、当代人にとつて最も興味の対象であり、憧憬渴仰の的であつた遊女の内情の報告は、人々を喜ばせたに相違なく、作者も読者もそれに満足し、決して文芸的な高いものを求めていたのではなかつた。従つて述作の目的は、迎合的煽情的な興味本位のものが多く、これがこの種評判記の救い難い性格を形作っていた。かくて評判記は、対象を現実にとりそれを写實的に描いて、そこに批判的精神を働かせ得る新しい分野を開きながらも、作そのものの目的や作家精神の低劣さから、遂にこうしたところに止まらざるを得なかつたのである。いわば評判記は、多く当時にあつても第三流の低俗な雑書と言つてよかつた。(傍線引用者^(八))

遊女評判記には遊女の批評を主とする遊女評判記（以下「評判物」と客や遊女に対し遊興の手管を伝授する諸分秘伝物（以下「秘伝物」）や案内記があったが、ここで小野が述べているのは遊女の批評を主とした評判物についてであろう。結論としては「低俗な雑書」であるものの、小野は評判物の文芸性が希薄な理由を、あくまでその時の遊女を著し、今まさに遊女を買わんとする「当代人」を喜ばせるためのものであったことに見出ししている。中野三敏はこうした特徴を「当代性」と呼び、評判物が当時の現実に照準を向けた史料であることを指摘している。^九。

「当代性」という性質は、その時々々の遊女を対象とする評判物にとっては非常に重要な要素である。同じく遊女評判記に括られる秘伝物も「当代性」は持とうが、秘伝物の中には過去あるいは他地域で発行された書を改題再板するようなものが少なくない。すなわち秘伝物はその時々にとらわれない、汎用性の高い書であったことが指摘できる^{一〇}。対して評判物は、時間がたつてしまえば本来の意味を失う、足の早い類の書である。本稿の目的の一つは、この評判物の「当代性」

という、まさにその時しか意味をもたない性格を、遊廓を明らかにするための資料として積極的に評価することである。

筆者は既に中野の言う「当代性」に注目し、「正確に言えばそれは男性にとつての遊郭の現実を語る史料」であり、「遊女評判記はあくまでも男性によって書かれ、かつ基本的には読者である男性に向けて書かれたものであり、そこから読み取れるのは「当代」の男性たちからみた、「当代」の男性たちが納得のできる遊郭の作法や遊女の姿であると言える」との見解を述べた^{一一}。しかし今一度遊女評判記のテキストに立ち返れば、そこには単に読者に向けるのみならず、先に挙げたような作者自身が楽しむための記述は勿論、遊女への語りかけや、作者の仲間内に向けたと思しき記述も散見される。更に言えば、そこからは、評判記の作成に周囲の客や遊女も口を出した様子が垣間見える。すなわち評判記は一方的に書き手が提供する書物ではなく、いわば読み手も参加するものであった。

以上を踏まえ、本稿では改めて遊女評判記がどのような経緯で書かれ、どのように読まれたのか、すなわ

ち遊女評判記は誰にとつて「当代性」をもつものであつたのかを明らかにすることとしたい。これに当たり、本稿では遊女評判記をめぐり、作者・周囲の客・遊女がどう関わつたかに注目する。また遊女評判記には先述のとおり遊女の批評を主とする評判物や手管を記す秘伝物その他があつたが、本稿では作者自身やその周囲についての言及を多く含む吉原を対象とした延宝期前後の評判物を主な史料に据えることとしたい。

なお史料の引用にあつては読みやすさを考慮し、常用漢字へ改める、平仮名に当たる漢字を「」で括りルビとして付す等した。「」のないルビはママである。また引用中の「」内及び傍線はすべて引用者による。

第一章 遊女評判記の変遷と延宝期の特色

第一節 遊女評判記の変遷

延宝記前後の遊女評判記を論じる前に、小野の論考「近世遊女評判記の性格」^(一七)および中野の論考「遊女評判記と遊里案内」^(一八)に依拠しつつ、他の論考も参照

しながら近世における遊女評判記及びその作者の変遷について概観したい。

遊女評判記は仮名草子の一種であると分類されているが、小野によると、そもそも「草子」の作者の多くは名を現わさず、署名していても戯号に過ぎないことが多いという。これは遊女評判記の作者についても同様であるが、稀にみえる本名の記述や作者自身の独白およびその戯号の意味合い等から、遊女評判記の作者は概ね遊廓内に住む関係者（楼主や下男等）、または遊廓に精通した客であつたと考えられている^(一九)。

但し一口に客といっても、その身分は幅広く、また推移もある。寛永年間までは市井の人から遊女評判記の作者を出すには至らなかつたようである。『露殿物語』^(二〇)（元和末―寛永初年頃／元吉原^(二一)）や『四十二のみめあらしそひ』^(二二)（元和四―寛永三年頃^(二三)／元吉原）など、初期には貴族趣味の横溢したものが多くみえる。また遊女評判記の出版について論じた柏崎順子は、『高屏風くだものがたり』の著者について、大名クラスの間人や分限者等の上層の人間であつた可能性を指摘している^(二四)。寛永以降になると、京都島原遊廓における有

力な楼主であった奥村三四郎の作と言われる『秘伝書』(明暦以前成立/島原)や『こそぐり草』(承応二年/島原)など、上方を中心として、楼主が遊女に対して客の扱い、すなわち「諸分」を説く諸分物も登場する。また遊女評判記の作者には全体を通して遊興の果てに破産・勘当された身であると自称する作者がしばしばみえるが、初期には富裕な町人の家督に生まれながら遊興によって破産してもなお「色道の開祖」を志した藤本箕山^(二八)等、生まれもよく教養もありながら身を崩したと思しき作者がみえる^(二九)。

しかしその後、新興町人等の台頭と安価な遊女の登場によって主要な客が大名等から町人へと推移し、遊女評判記の作者も、町人、板元や絵師、浪人・坊主等の手に移っていく。また明暦頃までは上方を対象とするものが多くを占めたが、万治(一六五八―一六六二)以降、寛文(一六六一―一七三三)頃から吉原を対象とする吉原物の出版が本格化する。それでも遊興の管を説く諸分物については以降も多くが上方の作者の手に依ったが、遊女の評判を主とする評判物やその他については、吉原物がその殆どを占めることとなる。この

吉原物の隆盛のきっかけとして、暉峻康隆は吉原における安価な散茶女郎の登場を挙げている^(三〇)。そして寛文期以降の評判記の盛行は「職業的作者」^(三一)、すなわち評判記で糊口を凌ごうとする作者の発生を促したとみえ、延宝期(一六七三―一七八二)には、客寄せの意図をもって特定の店の遊女を虜にするような評判物がみえるようになる。このような延宝の作風は天和・貞享(一六八一―一七八八)にも引き続きみられるもの、元禄(一六八八―一七〇四)以後の評判物は内容的にも量的にも次第に痩せ細っていく、具体的な記述は浮世草子・洒落本に譲られていく。管見の限りでも、特に宝永・正徳(一七〇四―一七一六)以降の評判物^(三二)は遊女を批評するものの画一的な賞賛が多くを占めており、内情の暴露や批判はほとんどなされていない。そして評判物は宝暦五年(一七五六)『吉原評判都登里』(交代繁栄記)改題)を区切りとし、以後遊女評判記は、洒落本・細見・名寄せに形を変えた。

野間光辰は、遊女評判記が寛永初年の『わらひ草のさうし』から宝暦五年『吉原評判都登里』までを含む、約二百一十種であることを示しているが^(三三)、小野は

井原西鶴が登場した天和・貞享の頃までに全約二〇〇種中約一五〇種が現れており、遊女評判記を寛永・宝暦のものとするれば、その前半の期間に殆どが刊行されていることを指摘している^(二四)。中野も西鶴の登場を画期とし、西鶴以前の遊女評判記を「初期評判記」、以降を「後期評判記」と区別している^(二五)。

また吉原物の出版が寛文の頃から本格化したこと、それに散茶女郎の登場が関係したと考えられることに既に触れたが、更に言えば、吉原では高級遊女である太夫、それに次ぐ格子女郎の遊び場である揚屋が、寛文の後、延宝から天和の頃に最も盛んであった。加えて、遊女評判記が衰退した宝暦頃には、太夫も揚屋も消滅した^(二六)。つまり評判記の隆盛は、吉原の隆盛と密接に関わっていたということである。またこうした吉原の盛衰や浮世草子・洒落本の登場の他、出版統制も遊女評判記の衰退に関わったことは宮本由紀子が指摘するところである^(二七)。

第二節 延宝期評判物の特色と評価

以上を踏まえ、本稿の主眼となる延宝期前後の評判

物の作者と性格、及びそれらに対する先行研究の見解について述べていきたい。

次に引用するのは、延宝期の作者の性格を示すものとして著名な『長崎土産』（延宝九年〔一六八一〕）の一節である。これは、この頃の評判物が単に筆のすざびとして著された書ではなかったことを如実に示すものである。

我も人も似たる事にて。はぎとられたるもの。上方にも多し^{おほ}。然ども今にこりたるいろなく。此道の批書^{しよ}など云て板行^{はんかう}しつ。自力^{じりき}なければ。物持の若人共をそのかし。太鼓^{たいこ}とも買手^{かいて}共わかちなく。さまよひありくもの多し^{おほ}。女郎屋^{ぢやうや}も揚屋^{あげや}も。曲輪^{まがわ}の内へのぞく事も。いやにおもひ侍るを。つよくあたりてハ、何ぞ。そてなきわる口を板行^{はんかう}されんもおそろし。且ハそめき^{かつ}〔ぞめき。遊郭をひやかして浮かれ歩く人〕の。若い衆^{わか}ともなふ人なれハゆるすべしとて皆。様々と云て。しらずかほにてやミぬ。^(二八)

これを要約すれば、次のとおりである。『長崎土産』

を書く自分もそうであるが、遊廓で遊び金銭を剥ぎ取られた者が上方にも多い。しかし懲りずに評判物（「批書」）を板行し、自ら遊女を買う金はないから物持ちの若人をそそのかして取巻きとなり、太鼓持とも客ともわからず遊廓内を彷徨い歩く。遊女屋も揚屋も内情を覗かれるのは嫌だが、強くあたって遊女評判記に悪口を書かれても困るから、或いはぞめき（ひやかし）で来たような若い人を伴って登楼してくれる人などであるから許そう等といって、皆しらない顔をするという。延宝以前にこのような作者が全くなかった訳ではなからうが、延宝期の評判物にはこういった作者の性格が露骨に顕れていることを、小野は次のように指摘する。

こうした〔前掲『長崎土産』にみえるような〕作者は、次第に売文者流に墮して、『吉原人たばね』（延宝八年刊）の作者今宮烏や『吉原あくた川名寄』の都鳥の如きは、作中にたびたび名を表わし、書肆はまた近刊予告をしばしば掲げて売らんかなの氣勢を示した。その執筆態度は、油虫朝臣濡高氏勘太郎・頓敵朝臣ふくべ氏十太郎（『吉原失墜』）や玉門寺隠

居（天和元年刊『吉原三茶三幅一對』）などの戲号に徴しても明らかのように、ふざけたものが多く、中には自分の温情を蒙った轡や遊女や或いは知人のために筆を曲げるような不純な態度もあって、本来客観的に月旦品評すべき評判記が著しく恣意的になり、露骨な主観の好悪によって無責任な評語を下し、内証をあばき悪罵を放ち、お茶（遊里で男女の交合や女陰をいう）のよしあしにまで筆が及ぶようなことが少くなかった。〔傍点ママ（二九）〕

ここで『吉原人たばね』の著者として名の挙げられている今宮烏は、かつて遊女の心中の介錯人などを経験した妓夫であつたらしい^(三〇)。その著作をみる限り、今宮烏は『吉原あくた川名寄』の作者都鳥と師弟的な関係にあつた。都鳥は後にみる通り浪人であつた可能性があるが、数多くの評判物を残した著名な職業的作者である。今宮烏は吉原で働く内に都鳥と懇意になり、遊女を買って批評する立場になつたのであろうか^(三一)。また都鳥自身も、『長崎土産』で述べられていたように、物持ちの若人、いわゆる大尽客（遊里で大金を

使つて豪遊する客)の取巻きかと考えられる。本稿で類出するこの都鳥は、吉原新町(京町二丁目)の山本家等と何らかの縁故があったらしく、山本家の遊女を最厭する偏つた批評をなしている^(三三)。また、板木屋との関係で筆を曲げる場合もあつた^(三四)。加えて都鳥がいくつもの変名を用いており、別人の作であるかのように評判物を作成していた可能性も指摘されている^(三五)。こうした作者らの執筆態度に対する批判に加え、小野は延宝期における評判物、中でも吉原物に「作者の楽屋落ち内証話」^(三六)が多いとし、延宝期の評判物を肯定的に捉えてはいない。

野間も延宝期の評判物に対する評価は辛く、職業的作者の多くが「『師^(三七)が身を喰ふ』摺り切者」、すなわち粹人ともてはやされ遊興に深入りし、身持ちを崩した者であるとした上で、次のように述べている。

従つて評判記は商品として売られるために、又作者の衣食の資を稼ぐために、或いは作者の通をひけらかし、馴染の遊女・揚屋への義理立てのために、自然その使命たる批判の公正を期するといふやうなこ

とは、到底望まらるべくもなかつたわけである。殊に延宝年間には、論難・返答の評判記が続出して、その数に乏しい遊女評判記年表の空白を埋めてゐるが、それらは殊更に論難・攻撃を繰返して、以て読者を釣らうとする単なる趣向に過ぎなかつたと思はれる。^(三六)

更に野間は、こうした状況は上方の評判記にもあり、西鶴が鳥原の評判記について「すいりやうの沙汰多く」と批判したことも指摘する^(三七)。

小野・野間の以上の見解に加え、中野も延宝期の評判物は「何やら版元のおもわく迄が重なり、不純な物が感じられる」とする。そして遊女評判記が先書を批判するのは常法であるが、寛文期の評判記が先の評判記に対し賛辞または中正な態度を取るのに対し、延宝期は先書の批判に終止していること、遊女評の内容も、寛文期は遊女を褒めるのに対し、延宝期は遊女や店のあけすけな批判と非難・暴露に陥っていると述べている^(三八)。

こうした先行研究で指摘されるとおり、延宝期前後

の評判物は、それまでの評判物とは隔たりがあった。それは遊女についての非難や暴露が多いことに加え、第二章でも詳しくみるとおり、懇意にする遊女屋や遊女のために曲筆したことが明け透けに記されている故である。加えて先述の都鳥およびその弟子らしい今宮鳥が著した評判物について言えば、小野が「柴屋落ち内証話」と揶揄するように、仲間同士の会話といった内輪話がその多くを占めている。従来の評判物が雑多な内容を含みつつも、案内記や遊女の広告の意味をもったものであるとすれば、都鳥一派の評判物がその役割を果たし得たかは甚だ疑わしい。

しかしこれらの評判物に対する批判の種の一つである、「不純」さ、すなわち公正・不公正という点について言えば、既に小野が「人物評には、とかく主観的な好悪感が伴いがちであり、「略」評判記作者の抱く評価に、客観性を求めることは困難である」と指摘する通り^(三九)、延宝期に限らずともまったく客観的な批評など存在しない。そもそも一人の作者がすべての遊女を知るべくもないことは、初期の評判物においても指摘がある^(四〇)。延宝期前後の評判物は確かに偏りが際

立っているが、だからといってそれ以前の評判物に不公平さがなかったかと言えば、そうではないであろう。偏りを明け透けに記す延宝期前後の評判物と、偏りがあったとしてもそれを思わせる記述のない時期の評判物を比較すれば、前者の粗が目につくのは当然である。

更に言えば、遊女評判記の作者・周囲の客・遊女がどう関わったかを探る史料としてみた場合、むしろ重要なのは延宝期における明け透けさである。『美夜古物語』のような批判を避けるためか、寛文〜延宝期以後の作者は、はじめから何人かの客で寄り合って評価したとか、評価の情報源がどの客かといったことを逐一明記する手段を取るものが多くみえるようになった。もっとも伝聞であることの明記は延宝記以前の評判記からあり、たとえば明暦元年（一六五五）の『嶋原集』などにも「ある人曰く」といった記述が散見される。しかし延宝記前後の評判物の特徴は、全てではないにせよ、その「ある人」の替名（遊里で客が用いる名）や住居等をほのめかす、または詳しく明記する点にある。更に「誰に温情を受けたか」や遊女に温情を受けた際の体験談さえも、この頃には明記されているので

ある。こうした記述が先行研究において不公平さを示すものとして非難されている訳であるが、しかしこうした明け透けな記述こそ、客である作者と他の客・遊女がいかに関わったかの検証には不可欠である。もちろんいくら延宝期の評判物が暴露に徹しているからといえ、すべての意図があらさまに示されている訳ではないし、虚偽もあるであろう。しかし作者同士で行われた暴露の応酬を紐解けば、作者の偏りを明らかにすることは難しくない。

これまでみてきたとおり、延宝期前後の評判物は積極的な評価がなされてこなかった。しかしそれはあくまで文学性の希薄さや、不誠実な執筆態度をめぐる評価である。本稿で注目する、評判物がどのような経緯で作成されたのか詳らかにするという目的にあたっては、延宝期前後の評判記はこれ以上ない貴重なものである。次章ではこうした視座のもと、延宝期およびその前後（寛文↷貞享頃）の吉原を対象とする評判物を主な史料とし、遊女評判記の作者・周囲の客・遊女の関わりについて考察を行っていく。

第二章 評判物の書き手・読み手・遊女

ここでは、延宝期およびその前後（寛文↷貞享頃）の吉原を対象とする評判物がどのように作成・受容されたのかを、作者とその周囲、より具体的に言えば作者・客・遊女の関係に注目し、考察を行う。これについては既に小野が指摘する部分も多いが、ここでは指摘に含まれていない記述も加え包括的に検討する。なお伝存する寛文↷貞享の吉原を対象とする評判物については表「延宝期前後（寛文↷天和）吉原評判物」にまとめたので、適宜参照されたい。

第一節 複数人の書き手と客からの情報提供

先述の通り、寛文↷延宝頃から作者が複数で作成する評判物、または情報の出典を明記するスタイルの評判物が見えはじめる。複数人で作成したことが明記されているものとして、早くは『吉原失墜』（延宝二年（一六七四）表No.5）、『吉原局惣鑑』（延宝三年（一六七五）表No.6）があるが、これ以前の『吉原

よぶこ鳥』(寛文八年(一六六八)表No.2)にも助言者らしい「伝三」なる人物の記述が頻出し、複数人で評判記を作成するやり方は寛文頃には既にあつたと考えられる。『吉原よぶこ鳥』のように、作者として明記されているのは一人でも、内容から複数人が関わった様子うかがえる評判物も多く、複数で作成したことを示す挿絵が付された評判物^(四二)もある。延宝三年(一六七五)『山茶やぶれ笠』(表No.8)の跋には、同書を作成するにあたって客を招き寄せたことについて、次のように記されている。

おてきたち^(招達)「客達」をまねき寄せ^(招)、ひとり／＼の心ねおもわくのよしあし^(思感)、ことこまやかにかたらせ^(細)、ふかきながれの道すし^(深)に、つめたき水のそこぬなく、それ／＼にかた^(誦)らせて、あやしき所はさつと^(種)「咎め」を入、くわしくたゞし書^(但)しるす。さる程にめい／＼のおてきのいみやうこと／＼書くわへ^(敵)あらはせば、^(何)なとかしやうこ^(証)にならざらんや。よろしき君は^(弥増)いやましに、あしきはたしなみたまふへし。^(四一)

ここからは、『山茶やぶれ笠』の作者が評判物の作成にあたって遊廓に通う客を招き寄せたこと、その一人から遊女について聞き取り、怪しいところは精査して但書をするなど記述に気を配ったこと、また客の替名を証拠(「しやうこ」として記したことがわかる。たしかに同書には、情報提供者らしい客の住居と替名の記述が頻出する^(四三)。証拠を記す理由は他の作者や読者に対し自らの正当性を強調する意味もあつたであろうが、ここでは最後に「よろしき君は弥増しに、悪しきはたしなみ給ふべし」(よく書かれた遊女は一層よくし、悪く書かれた遊女はつつしんでください)とあり、遊女からの苦情も念頭に置いていたことがうかがえる。

この他、吉原を対象としたものではないが、『大坂新町古今若女郎衆』(延宝九年(一六八二))などには、「拳屋」(揚屋。遊女を呼び遊興する店)の裏の座敷を借り、作者と協力者(太鼓持)が評判記を作成したことが記されている^(四四)。評判記の作成場所が揚屋であることについて、小野は「依怙眞員の生ずる因をなすものと見てよい」^(四五)と指摘している。また『吉原あく

た川名寄』(延宝九年〔一六八一〕表No.12)も、先にも触れた職業的作者の都鳥を中心に、十人程で評を成している。本書は遊女の批評をめぐって作者たちが議論を戦わせ、それを詳述するのが一つの趣向となっている。しかしこうした議論は実際的なものというよりは、「仲間誇り」「仲間褒め」の類であることが指摘されている^(四六)。すなわち、真に迫った議論というよりは、仲間同士の馴れ合い・じゃれ合いに過ぎないということである。一方で都鳥たちと対立する評判物作者「四ノ宮」^(四七)については一様に厳しい批判がなされており、公平さを装ってはいるが、あくまで一つの仲間内で作成された評判物と言える。執筆協力者の中には前述の今宮烏(『人たばね』作者・都鳥弟子)もおり、職業的作者都鳥の周辺にある種の派閥、いわばコミュニティが生じていたこと、同時に、それに与しない者や敵対する者たちも存在した様子がうかがえる。

普段からそうした作者をめぐるコミュニティに関わりを持たずとも、評判物の作成を聞きつけ批評を頼んで来る客もいたらしい。たとえば『吉原大雑書』(延宝三年〔一六七五〕)には新町〔京町二丁目〕たてさ

し伊左衛門内の遊女^(四八)「初瀬」の評に「此君にひなんを、かきまいらせよとたのむ人おほけれど、ひとつ又かくべきいとすしもなければひかへ侍る也」^(四九)という記述がみえる。「初瀬」は客らから何かしらの恨みを買っていたのであるうか。また『吉原歌仙』(延宝八年〔一六八〇〕表No.9)には、『さん茶評判胡椒頭巾』(延宝八年〔一六八〇〕)、現在散逸」という評判物が作成される際、「せいしゆ」という遊女と深い付き合いの客が、むしろその思い入れの深さ故に悪く書くことを依頼したというケースもみえる。

●おもだかやのせいしゆ〔江戸町二丁目・散茶〕

〔略〕
この比いでたるこせうつきんといふそうし、ある人かきするおりふし、このせいしゆにふかくあふきやく、さげさかなをと、のへきたりて、たのみたき事有といふ。いかなる御むしんぞといへば、うけたまはり候へは、さんちやの書物を御出し候よし、風のつてにきく。さだめて、おもだかやせいしゆか事も御かきあるべく候。たのみ申たきといふは、

われら事、せいしゆにあひ候。それにつき、せいしゆが事をなるほどく(あ)あしうかきて給はり候へと(頼)たのまる、よし(由)、こせうづきんのさくしや(胡椒頭巾)のものかたりなり。ふかきこ(心入)、ろいれもあるにや。(五〇)

これによると、遊女「せいしゆ」の馴染み客は評判物作成を「風につてに」知り、酒肴を持参して悪評の執筆を頼んだという。これは作者の仲間以外も批評に関わったことをうかがわせるものである。こうした記述が事実であるかは確かめようがないが、他の評判物にも客に頼まれたため、良く・悪く書く、あるいは書かないといった記述は散見される。次はいずれも『吉原あくた川名寄』(表No11)の記述である。

三浦うち 篠崎〔京町〕

〔略〕

かの事、あとより大豆(まめ)だはら〔吉原大豆俵評判〕にはかりいれん。このたびは本町筋より(深)ふかくたのむものあれば、石火矢(石)はのかれたまひき。(五一)

三浦内 野沢〔京町〕

〔略〕

ざくし(作者)やもちかづき(近)ならねども、ざいもく町(材木)より(深)ふかく頼人おはせば、ひいき(御座)の筆にまかせたと人はいへ、かさねてはまめたはら(豆俵)にきつと申しらせん。(五二)

ここでは「本町筋」や「ざいもく町」とあることから、これらの依頼主が廓外に住む客であったことが推察される。このほか単に「頼む人ありて」や、「ゆかりの人、深く頼むにより」といった、依頼主が客なのか店関係者なのか、わからないような記述も頻出する(五三)。『長崎土産』にはあまり聞かない遊女を批評することに對し「もしハ縁有ての引にてハなきか」との問いがみられ(五四)、伝聞であることの明示は公平性を示すために必要であったのであろう。またこうした客からの依頼や情報を、妥当であるか判断したという記述も散見される。たとえば都鳥は『吉原大豆俵評判』(天和三年〔二六八三〕表No15)において、自らの評判の姿勢について次のように述べる。

作者は十人のつたへき(伝)、五つまではゆるし(評)、七つに及、是をゆるさずかき出す也(書)。みなあい給ふてき(普)よりつたゆるを、作者のとかのことくらみ給ふ。作者わ近付ならねはきやうさ(五五)「たぶらかすこと」はしらすつたへ、以爰にあらはす。世のさたとなし(抄法)、とかく御たしなみ候へ。(五六)

すなわち、都鳥は客から遊女についての評判を聞いた場合、十人中五人が言っても取り上げないが、七人が言っていれば評判に取り上げるといふ。そしてそれについて遊女から恨みを買うが、自分は伝え聞いたことを書いたのだから、世間の評判とし、遊女はたしなむべきであるといふ。このように客から聞いた情報には慎重なようであるが、都鳥は同書において「ほんぶ千人のみるめ(凡夫)より、都鳥ひとりのみるめ(凡夫)はるか(上)へならん(五七)」とも述べており、自らの主観の偏りには意識的でなかったこともうかがえる。

以上からは、作者が自らの主観のみならず、接触してくる客からも情報を取り入れながら評判物を作成した様子がかがえた。このことから、評判物作者が

廓内において、ある程度その名や顔が知られる存在であったことが指摘できる。つまり評判物は、作者のみならず、作者を軸とした客との関係性のなかで作成されたものということである。更に注目されるのは、その関係性の中には遊女も含まれていたという点である。先に挙げた『吉原大豆俵評判』の最後の語りかけ（「とかく御たしなみ候へ」）のように、評判物には遊女に向けた言葉が散見される。次節ではこの遊女と評判物の関わりという点に注目し、評判物の記述をみていくこととしたい。

第二節 遊女と作者の関わり

評判物の作者が店から嫌厭されたらしい上、遊女にも恨まれたらしいことは先に『吉原大豆俵評判』における都鳥の記述からみた。今宮鳥も、都鳥が悪言を放つ故に遊女に恨まれたと述べており(五八)、都鳥に批判的な大ぬれや茂助（『吉原下職原』作者…表No.13）も、都鳥が遊女小紫に罵倒されたことを暴露している(五九)。この暴露には「こむらさき(小紫)しかるところ」と「らうにん(浪人)」の図も付されており(六一)。都鳥の身分は不明だ

図1 『吉原下職原』（延宝九年）

「むらさきしかるところ」「らうにん」

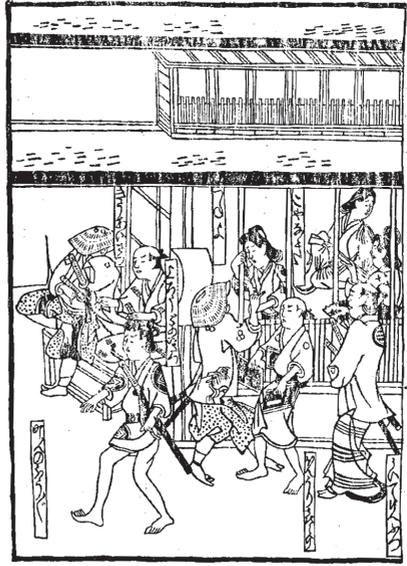


が、あるいはこの叱られる浪人が都鳥を指すのであろうか。諸分物に遊女を対象としたものがあつたことは先にも述べたが、評判物も遊女が読むものであり、またそれを意識したと思しき記述も多くみえる。

遊女評判記の販売

遊女が評判物を手に取れたのは、評判物が吉原内で売られていたためである。ここで簡単に、遊女評判記の販売について触れておきたい。評判物『吉原草摺引』や『吉原出世鑑』の訴訟関係史料からみる限り^(六二)、遊女評判記は大伝馬町通旅籠町の本屋や通油町の双紙屋など日本橋周辺で販売されていた他、吉原内で売られていた。『吉原出世鑑』の売り所としては「新吉原江戸町一丁目又兵衛店彌七」がみえ、これは吉原細見『細見多知姿』（宝暦四年春）や『丸山土産』（延享五年春）などをみる限り、妓楼ではなく、薬商人の大坂屋又兵衛である。他に吉原内での販売については評判物『山茶やぶれ笠』（延宝三年（一六七五）の挿絵にも^(本売)「ほんうり喜之助」がみえ^(図2)^(六三)、小野は遊女評判記が廊中で売り歩かれ、訪れた客はもちろん、店の関係者や遊女などの手にも渡つたであろうことを指摘している^(六三)。また長友千代治は、寛永のはじめ頃から行商本屋は貸本屋を兼ねていた可能性があるとし^(六四)、この「ほんうり喜之助」も貸本屋を兼ねていたであろうことや、遊廓に貸本業が出入りしたこと、

図2 『山茶やぶれ笠』(延宝三年)
「ほんうり喜之助」



遊女が読書したこと等について各書の挿画から詳細に論じている^(六五)。すなわち遊女も当然評判物の読者たり得たのであり、遊女が時に評判物の作者を罵倒したのも無理からぬことであろう。

遊女と評判記作者

このような事情からか、先述の都鳥以外にも避けられた作者はいる。次は作者未詳『吉原歌仙』(表No.9)

の引用である。

大^(黒屋)こ^(梅が枝)く^(任)やむめかえ〔江戸町二丁目・散茶〕

〔略〕

つてを以てきけば、此いゑのうちのわかきものに御こゝろざしかよふものありとぞ。もし、かの又兵へにてはなきか。たがひにたしなめく。なんたる事にや、この比は、みちにあひましても、われらを御らんずるとそうくかけこみ、まかき〔遊郭の見世の格子戸〕にては、かほをよこにさせらるゝ。ふか草の少将か露ときゑにしそのおんねん、おぼしめしだせ。^(六六)

ここでは遊女「むめかえ」^(梅が枝)が同じ家の「わかきもの」(妓夫力)と恋仲になっていることが難じられ、加えて遊女が作者を避ける様子が記されている。『吉原歌仙』の作者は教養があることが指摘されているが^(六七)、その身分や生業は不明である。しかし『吉原歌仙』の時に既に遊女に避けられているということは、以前にも評判物を執筆したか、あるいは日頃から遊女にうるさ

く言い、恨みを買っていたと考えられる。遊女が真情を捧げる男は「間夫」（まぶ。間男とも）と呼ばれるが、ここで「むめがえ」^{（種が枝）}が批判されているように、遊女と間夫の関係を批判する評判は非常に多い。間夫の名が日々暴露される場合も多いが、とりわけ厳しい目を向けられるのは間夫が廓関係者であった場合である。たとえば『吉原大雑書』（表No.7）には「お丁」（吉原のこと）の間夫をもっていた遊女「薄雲」（太夫）などが三浦屋の楼主に折檻されたことが暴露されている^{（六八）}。間夫が嫌われるのは揚代を払わずに遊女と密会する場合がある等、種々の要因がある。しかし歌舞伎「助六」における「間夫が無ければ女郎は闇」との台詞を引くまでもなく、間夫は辛い客勤めの中で励みともなった。そのような間夫を告発する評判物の作者やその周囲は、遊女にとつて煩わしい存在であったことは想像に難くない。

この他、上方の例になるが、『色道大鑑』の著者で知られる藤本其山も、新町の遊女から評判について咎められたことが『美夜古物語』（明暦二年〔一六五六〕頃）^{（六九）}で暴露されている。其山が新町の評判物『満散

利久佐』を著したのは明暦二年（一六五六）であるから、遊女からの苦情は評判物がうまれた当初からあったのであろう。

一方で作者を避けるのではなく、評判の申し開きのため、作者に会いたがる遊女もいた。次は『吉原大豆俵評判』（表No.15）の第一番に載せられ、絶賛されている遊女「小泉」の評である。

小泉〔太夫〕 隠居内

新町三浦

〔略〕

此君都鳥に何やらん御あい被成度よし承り、其節まかきも二三と四五とまいり、善悪の二つうけ給はらんと思ふ所に、をのつから雲井の月あくうんはれ^{（贈）}てもとのせいけつ^{（自ず）}となり給ふ事御てからと^{（手解）}をもふによ。^{（思う）}（七一）

都鳥が『吉原大豆俵評判』の前に書いた『吉原あくた川名寄』（表No.11）では、遊女「小泉」（『吉原あくた川名寄』では「小和泉」）は「うはき」^{（評気）}であること等を

批判され、酷評を受けている。しかし右の記述からは「小泉」が都鳥に申し開きを求め、都鳥もそれを受け入れたことがうかがえる。評判物の批評がいかに恣意的であったかがわかる例であるが、注目すべきは、この頃の評判物が作者（およびその周囲）と遊女との関係性に基づき作成されていたということであろう。他にも『吉原あくた川名寄』には、作者と遊女が不和であったという記述は散見される^(七三)。

特定の作者と遊女が不和になった場合、他の遊女や作者が仲介に入るともあつた。たとえば『吉原人たばね』（表No.10）の兵庫屋の遊女「りしやう」評には、やはり遊女の「せんしゆの君」^(七三)に深く頼まれたため、今回は思う所あるが書かないといったことが記されている^(七四)。また『吉原あくた川名寄』（表No.11）には、都鳥と不和で悪い批評をうけていた三浦屋の太夫「小紫」について、「三うらのうちいでたるはつね」^(初音)、すなわち既に三浦屋から出た遊女「初音」^(七五)から手紙で申し開きがあつたことも記されている^(七六)。遊女「小紫」と都鳥の仲は随分こじれていたようで、都鳥の弟子今宮鳥はその関係性を「筆がたき」と称している。

しかし今宮鳥は都鳥の立場は踏襲していない。その理由として、『吉原人たばね』を執筆する際に「小紫」から「ちかつきならねと一書をさしつかはし」て来たことと、また遊女「唐崎」が亡くなった後、「小紫」が「唐崎」の忘れ形見である遊女「かせんの君」を「ついせん」として太夫「薄雲」に冠したことを絶賛し、「小紫」を悪く書いた都鳥について「めにごみ入たりと見えし」と断じている。当時吉原で第一の位とされた太夫である「小紫」が、一作者である今宮鳥にわざわざ一書を遣わしたという点は興味深い。恐らく都鳥との不和もあつて他の作者との交流を図つたのであろうが、先述の通り今宮鳥はかつて廓で下働きをしていたような者である。『吉原あくた川名寄』の三浦屋の太夫「高尾」の評にも「御身世俗のゑんま（今宮鳥）」として、太夫かうしを「しらず」^(七七)とあることから、今宮鳥は実際に太夫を買えるような立場にはなかつたのである。評判物の作者という存在が廓内である種の権威を持たなければ、「小紫」が今宮鳥に手紙を送ることとはあり得なかつた筈である。同書「高尾」評には、「小むらより、たかをににくきところあり、しさいは、

たかを(高尾)といへる名をつぎて、もとのさくしや(都鳥)をうしろにたて、人しらしと思ふ(不義)ふぎ(不義)、すたなり(数多)と遊女「高尾」が都鳥の勢いを利用していたらしいこともみえ(七〇)、作者がいかに遊女に影響力を持つ存在であつたかが垣間見える。

こうした記述からは評判物の批評をめぐる遊女・作者の様々な思惑の交錯がうかがえるが、更に評判物は遊女が他の遊女を貶めるための手段にもなり得た。たとえば『吉原大雑書』(表No.7)には、京町三浦屋の遊女「さんしゆ」(七九)に盗癖があることが暴露されているが、このことについて「まさしく御ほ(傍筆)うばい(時分)中の御(話)はなし(七草)にて、な(八〇)くさみたれ(頼)のじふんたのみ給ふによつて」とあり、遊女仲間「ほうばい」から頼まれて盗癖を記したことがうかがえる(八二)。また『吉原あくた川名寄』(表No.11)には、遊女が手紙によつて悪評を依頼したらしいことがみえる。

山本内 小主水〔新町山本内小主水・格子〕

あの山本に居て、した(舌)き(切)れ(雀)す(雀)め(雀)のむ(昔)かし(語)かたり(雀)か

といふ人(播)有て、あら(播)は(播)に(播)にく(播)ら(播)しく(播)かけよ(書)と一書(書)をさ(流)ぐる人(流)あれ共、そこはかすかの里にゆかり(留)のな(留)かれをし(留)とふ(留)さくしや(留)たれは、ひ(留)いきと筆をと、めぬ(八二)

遊女「小主水」について「にく(憎)ら(憎)しく(憎)かけよ(憎)と「一書」を遣わした人物は明記されていないが、「あの山本に居て」とあり、また老婆が悪役となる舌切雀を引合いに出すあたり、「小主水」と同じ遊女屋山本内の年増の遊女、あるいは遺手ではないだろうか。他にも同書にはかつて『吉原人たばね』(表No.10)作成の際に、遊女「八橋」の悪評を手紙で「ざんげん」(讒言)してきたらしい遊女(八二)のことが暴露されている。

太夫の三 八橋 〔新町〕 理右衛門内

さ(者)るもの、ざんげん(穢言)によつて、かく(注)う(注)き(注)名(注)にし(注)つみ(注)給ふ。是をさ(察)つし見るに、もとゑん州(罪)『吉原人たばね』作者今宮鳥(罪)に文をもつて八はし(橋)のつみ(罪)をいつ(偽)はり、お(不)のれが(差)ぶ(配)ざ(差)はい(配)のともになさんとほか

る。「略」八はし（橋）の身のう（上）へをいつはり（佛）そにん（訴人）したる女郎の名、からころもきつ（文字）、といへる七もじ（文字）のうちにもれり。此七もじ（文字）にてな（名）をつくりて見よか（八三）。

かつて今宮鳥は『吉原人たばね』で遊女「八橋」について悪く書いたが、それは手紙で讒言があったためで、その讒言をしてきた遊女の名は「からころもきつ」という七文字の中に含めたという。この七文字が余分な文字を含むアナグラムということであれば、遊女の名前は「かつらぎ」であろうか。同時代の「かつらぎ」には新町山本内の格子がおり、『吉原あくた川名寄』にはみえないが、『吉原人たばね』で好評されている（八四）。遊女が手紙をもって依頼する例はこれまでも見えたが、悪評の依頼であっても差出人が判明しているのは妙である。いづれにせよ、遊女が手紙をもって他の遊女の悪評を依頼したことは遊女同士の関係をみる上でも興味深い。遊女同士の傍輩付き合いが悪いと余計に噂が立つたらしいことは、初期の評判物『難波物語』（明暦元年〔一六五五〕／島原／諸分物／作者

未詳）においても指摘がある。次は遊女「薫」の批評の一部である。

判云、あるひ（或い）はだんな（旦那）、あるひ（或い）はあげやと、手くだ（管）する人もあまた（数多）なるに、この人、とりわきて名（名）のたつ事は、はう輩（傍）づきのわろきゆ（悪）へなり（八五）

右の引用の前段において、作者は遊女「薫」が「若旦那（旦那）」などあち「色めいていること」あるよし」と、恐らく遊女屋の若旦那と関係があることを難じている。したがって右の引用は、「薫」と同じように廓内の男女が情交をもつことはままあるのに、とりわけ「薫」の噂が立つのは、「薫」が遊女同士（傍輩）の付き合いが悪いためである、との意であろう。評判物における悪評を恐れば、遊女は客にも傍輩の遊女にも気を遣わねばならない。なお島原を対象とした評判物、特に『朱雀遠目鏡』（延宝九年）や『朱雀信夫摺』（貞享四年）、『朱雀遠目鑑跡追』（天和元年頃）等ではほとんどの遊女の評判に「傍輩付」（仲間付き合い）の善し悪しについての言及があり、あるいは上方では傍輩付き合

いが遊女の資質として重視されていたため、先の『難波物語』のような記述に繋がったとも考えられる。

以上のとおり評判物の記述からは、遊女たちが評判物における自らの悪評に腹を立て、ときには傍輩の評判を気遣い、あるいは傍輩を貶める手段として用いるなど、様々な形でその作成に関わったことがうかがえる。つまり遊女は単に記述される対象や読み手に留まることなく、時に作者に情報を提供する形で、書き手の側にも加わったということである。

おわりに

以上遊女評判記の中でも延宝期前後の吉原を対象とした評判物に着目し、これらの遊女評判記が誰にとつて「当代性」を持つものなのか、すなわち誰にとつて意味のあるものであるのかについて考察を行ってきた。

延宝期の作者の多くは先に『長崎土産』からもみたとおり、大尽客の取巻き、いわば太鼓持である場合が多かった。しかし太鼓持に留まらず、遊女と遊ぶ買い手にもなったらしいことは、冒頭にみたような「通り

者」自慢に加え、評判中にみえる遊女に宛てた個人的なメッセージ、たとえば温情を被った御礼などからうかがえる^(八六)。したがって、多くの作者が買い手、すなわち客としての一面をもっていたことは間違いない^(八七)。

しかし第二章でみたように、評判物の作者は単なる買手や太鼓持に留まらず、その地位を高め、廓内においてある種の権威をもつ存在に至った。遊女が評判物の作成に関わる姿をみても、作者をただの客としては扱えなかったことがわかる。もちろん作者らの背後に、寛文く天和頃の揚屋の最盛期に遊ぶ大尽客の存在を忘れてはならない。また宮本が指摘する通り、こうした作者の勢いはその板元の勢いとも不可分であったであろう^(八八)。すなわち作者らは、客あるいは板元の力を背景に、評判物作成という権威を軸にして、周囲の客や遊女を巻き込んだ「当代性」を共有する関係性を形作っていたということである。

以上を踏まえれば、延宝期前後の評判物は、見も知らぬ客に対する案内や広告を意識したものというよりは、作者が見知った遊女、とりわけ太夫等の高級遊女

に加え、周囲の客、あるいは自分と敵対する評判物の作者等をより念頭に置いたものであり、むしろそれらの人々にとって「当代性」をもつものであったと言える。更に言えば、読み手として意識されたそれらの人々は、常に単なる読み手であった訳ではない。読み手は書き手に大いに口を出したのであり、評判物はいわば読み手と書き手の双方向的な関わりによって作成される書であった。

こうした延宝期評判物の特色はまさに小野が言うとおり「楽屋落ち内証話」であり、仲間内の同人誌の域を出ない。しかし忘れてはならないのは、いくら評判物が内輪向けの記述をふんだんに含むものであったとしても、その多くは刊本として発行され、吉原を訪れる人々の目に触れたということである。つまり非常にミクロな世界を記述の対象としながらも、その読み手は多分に広がりをもっていた。そうであるからこそ評判物の作者は、当時最高級の遊女らに特別扱いされるなど、ある種の権威をもつに至ったと考えられるのである。評判物は、内向きと外向きの要素を併せもつ書であった。

更に、重要なのは内向きの要素である「楽屋落ち内証話」こそ、当時の遊廓を明らかにするにあたって貴重な記述であるということである。これまで遊女評判記、その中でもとりわけ延宝期の評判物は、先行研究において好意的に受け止められてこなかった。しかし延宝期の評判物はまさにその時の吉原の一情景を浮かび上がらせるものであり、同じく精細に遊里を描写しながらも、物語に仮託し文芸性を高めた洒落本や浮世草子とはまるで相違する。遊女・客・作者らの「当代性」を明らかにするという意味において、延宝期の評判物は、文芸性とは全く異なる位相の価値を有するのである。

注

(一) 『日本国語大辞典』「遊女評判記」の項。

(二) 「爰にある人、よしはら袖か、み、よしはら根元記をなして大全といふさうしをたずさへきたりて、此さうしのうちにはなのおとの枝となりてをらぬやつもあり、新樹のわかばへの出来たもおほし、所くすみつけくれよといふ」等とある（吹上氏かわずのすけ安方「吉原讃嘲記時之太鼓」〔江戸吉原叢刊刊行

会編 二〇一〇a、二五二頁。

(三) 宮本 一九九一、六六頁

(四) 吹上氏かわずのすけ安方「吉原讚嘲記時之太鼓」〔江戸吉原叢

刊行会編 二〇一〇a、二七一頁〕（※と町助左衛門内いっ
み、後段）

(五) 同右、二八二―二八三頁（すみ丁権左衛門内みはる）

(六) 小野 一九六五b、一八一―一八二頁

(七) 詳細は拙稿 二〇一九を参照のこと。

(八) 小野 一九六五b、三六五―三六六頁

(九) 中野 一九八五、七八・二二頁

(一〇) 延宝八年「色道諸分難波鉦」は初期の島原の評判記『こそく
り草』『秘伝書』などを基礎としたことは（野間 一九五七）で
指摘されている。『色道諸分難波鉦』は『諸分店風』（年未詳）

や『好色罌粟鹿子』（元禄七年）にも改題再板された。また島
原の遊女の名寄せを付した秘伝物『ね物がたり』（明暦二年）

は、遊女の名を吉原の遊女に変更して『吉原鑑』（万治二年）と
して再板された。

(一一) 拙稿 二〇一六

(一二) 小野 一九六五b

(一三) 中野 一九六四

(一四) たとえば小野は、『吉原人たばね』の著者今宮烏が遊女の心

中の介錯人であったこと、『吉原讚嘲記時之太鼓』の著者吹上
氏かわずのすけ安方が吉原の揚屋町で二・三年奉公していたら
しいこと、『大坂新町古今若女郎衆序』の協力者に太鼓持がい
たこと等を指摘し、作者は遊女を買う立場にありながらも、し
ばしば廓内に入りし、遊女の生活行動に関わり合いをもつ存
在であったことを指摘している（小野 一九六五b、二七八
頁）。但し作者の素性の記述については「ある種の擬態のある
ことは念頭に置かなければならない」（同、三六七頁）とも注
意をうながしている。

(一五) 遊女評判記が対象とする遊廓。以下同じ。

(一六) 安原眞琴「解題」（四十二のみめ評ひ）（江戸吉原叢刊行会
編 二〇一〇a、四八七頁）

(一七) 柏崎 二〇一〇、七一頁／作者が元吉原と新吉原の双方
の様子を伝え、さらに二度上方に上った際に京の島原と大坂の新
町へ行き、両地の評判も記していることから推測されている。

(一八) 『満散利久佐』（明暦二年／大坂新町）および『色道大鏡』（延
宝六年序／島原中心諸国）の作者。

(一九) 他に小野は『嶋原集』『桃源集』とも／明暦元年／島原の
作者が「学書生の成れの果て」と推測している。これは文辞や
序跋の署名（小藤原定家序・鏗田鈍太郎末孫白面書生跋）等に
よる推測である（小野 一九六五b、三六四頁）。

(二〇) 暉峻 一九五三、一三六頁／寛文八年、江戸市中の非公許遊

里の摘発に伴い大量の隠売女が吉原に流れ込み「散茶女郎」という新しい遊女の等級をつくりだした。従来の吉原遊女と異なり手軽く遊べたため人気を博し、吉原の大衆化が進んだ。

(二一) 野間 一九四〇、「一九四八、一三頁」

(二二) 宝永六年『吉原大黒舞』、正徳二年『吉原七福神』、同年『吉原大評判』にし染等。

(二三) 但し最初の遊女評判記については異論があり、寛永初年頃刊

の『露殿物語』が最古の遊女評判記とする見解が多い(小野一九六五bや『日本国語大辞典』『遊女評判記』等)。

(二四) 小野 一九六五b、三五八頁

(二五) 中野 一九六四

(二六) 宮川 一九二七、七六頁

(二七) 宮本 一九九一、六九頁

(二八) 前悪性悪大臣嶋原金捨「長崎土産」〔近世文学書誌研究会編一九七九、三二五―三二六頁〕

(二九) 小野 一九六五b、三六五頁

(三〇) 今宮烏「吉原人たばね」〔江戸吉原叢刊行会編 二〇一〇

c、一〇六頁〕(第六、小さいみ評)

(三一) 今宮烏については小野(一九六五b、二七七―二七八頁)が詳しい。

(三二) 都鳥による『吉原あくた川名寄』は山本家の遊女に好意的な

一方三浦屋の遊女には批判的であるが、『吉原下職原』の作者からは『吉原あくた川名寄』では山本家と三浦屋といった「大くつわ(轡)」の遊女ばかりが取り上げられていると批判されており(米河岸之住人ほんほち氏大ぬれや茂助作・若信序「吉原下職原」〔江戸吉原叢刊行会編 二〇一〇c、二二三頁〕、京町の三浦屋とも何らかの縁故があった可能性も考えられる。

(三三) 今宮烏「吉原人たばね」〔江戸吉原叢刊行会編 二〇一〇

c、八九頁〕(山本内ふぢえ評の後段)

(三四) 小野 一九六五b、二七三頁／評判物は先書の論難を行い自己の正当性を強調するという応酬が初期から行われていたが、都鳥はこうした論難を、真実味をもたせるために自ら行つていた可能性がある。

(三五) 小野 一九六五b、一八三頁

(三六) 野間 一九四〇、一三―二四頁

(三七) 野間 一九四〇、一五頁

(三八) 中野 一九六二、二九頁

(三九) 小野 一九六五b、六四―六五頁

(四〇) 諸分秘伝物『美夜古物語』(明暦二年刊／作者未詳／鳥原の記述である)。

その上へ。おほき女どもの事をのみ。ひとりして、其
〔味わい〕〔短〕あちはひしらるゝ物にあらず。おほくはすいりやう、又は、
人〔尋〕にたづねてか、んずらめ。其たづねられし男。はなす内
〔遊女と付き合ひのある内〕ならばよくいふべし、かれたる
〔振られた、付き合ひの切れたの意か〕おとこにたづねば。よ
くてかるゝはまれなれば。なき事もつけて。あしくぞは
はんずらめ。人だのめにかくは。まこと成こと。すくなかる
べし。〔小野 一九六五a、二五三頁〕

ここでは推量で書かれる評判物の存在や、人に尋ねて評判を
記す場合の主観の問題が難じられており、評判物の危うさが初
期から認識されていたことがうかがえる。

(四二) 『吉原局惣鑑』、また大坂新町が対象であるが『難波鉦返答』
〔古銀買〕とも。延宝八年〕等。

(四三) 小石河住山水氏頓滴林「山茶やぶれ笠」〔江戸吉原叢刊行
会編 二〇一〇b、四一四頁〕

(四三) 「山茶やぶれ笠」〔引用・頁数は江戸吉原叢刊行会編 二〇
一〇b〕から抜粋すると、「すまといふもの」(二丁目松屋内田
宮・三三七八頁)、「はん町六かたる」(式丁目まつや内正木・三
八二頁)、「下やにすむやまといふ人にきく」(式丁目藤や内利
生・三三八四頁)、「いちといふものにくわしくきく」(式丁目し

やうく屋内和泉・三三八七頁)、「町人源にきく」(さかい町と
もへや内友江・四〇四頁)、「予かつれ、六といふもの」(さか
い町くしやくや内初山・四一一頁)等、枚挙に遑がない。

(四四) 作者未詳「大坂新町古今若女郎衆」〔小野 一九六五a、五
八一頁〕

(四五) 小野 一九六五b、三〇六頁／小野はこの理由について詳述
していないが、揚屋は基本的に太夫・格子といった高級遊女の
みが呼ばれる場所であり、太夫や格子の中には特定の揚屋を
「定宿」とし、揚屋を指定して客と会う者もいた。したがって
作者と揚屋の結びつきは、特定の遊女や置屋(遊女を抱え置く
店)との結びつきを思わせるものである。

(四六) 水谷隆之「解題」〔吉原あくた川名寄〕〔江戸吉原叢刊行会
編 二〇一〇c、四三一頁〕

(四七) 延宝三年(一六七五)頃に『万年暦』を著したとされる江州
浪人。『万年暦』は伝存しないが、『山茶やぶれ笠』〔吉原人た
ばね〕〔吉原あくた川名寄〕等に引かれている。

(四八) 『吉原大雑書』冒頭の「たゆふかうし」の名寄に名がみえ、太
夫または格子と考えられる〔江戸吉原叢刊行会編 二〇一〇
b、三〇九頁〕。

(四九) 頓滴林カ「吉原大雑書」〔江戸吉原叢刊行会編 二〇一〇
b、三五三・三五六頁〕

(五〇) 作者未詳「吉原歌仙」〔江戸吉原叢刊行会編 二〇一〇c、一三三頁〕／遊女の位および町名は「吉原三茶三幅」対（延宝九年）を参照した。

(五一) とうらくしとんせい坊（都鳥）「吉原あくた川名寄」〔江戸吉原叢刊行会編 二〇一〇c、一九五頁〕／篠崎の位は不明だが、同書は太夫の場合は明記されているので、格子かと思われ

る。

(五二) 同右、一九九頁／位は不明だが、右の篠崎と同じく格子か。

(五三) とうらくしとんせい坊「吉原あくた川名寄」〔此君の事ぜひよろしくと頼む人有により〕（山本内わかむらさき…江戸吉原叢刊行会編 二〇一〇c、一八五頁）、「小むらさきのゆかり

の人、ふかく頼むにより、せひなく筆はひかへぬ」〔三浦内左京評・同前、一九五頁〕、「去人、此事をふかくたのむにより、書たき事あたかもふじはいそなり、され共此たひはゆるしはん

べる」〔三浦内小好・同前、一九六頁〕、「ぜひと頼むといふ人有て、作者がたもとにすかる」〔三浦内香久山・同前、一九六・一九七頁〕／作者未詳「吉原よぶこ鳥」此君ばかりは、ぜひ／＼かきのせくれよとわりなき所望なれば。まことにその心のうりもあわれにおぼえて書付侍りぬ」〔遊女名欠、花月評カ…江戸吉原叢刊行会編 二〇一〇a、三〇四頁〕／作者未詳「吉原袖鑑」此書に在るべき女郎にあらず。然どもさるかたによ

りたのまれしゆへあら／＼書入事」〔京町孫左衛門内まさつね…江戸吉原叢刊行会編 二〇一〇b、二〇八頁〕／今宮鳥「吉原人たばね」「われ／＼も、かすかのゆかり、せひたのむといふ人有ければ、あしかれとは思はず」〔三浦内かせ山…江戸吉原叢刊行会編 二〇一〇c、九二頁〕

(五四) 渡邊新左衛門内出雲の批評中〔近世文学書誌研究会編一九七九、四一九頁〕

(五五) 「きょうさ」は「教唆」、あるいは「誑評」「巧評」か。

(五六) 不申共御推氏（都鳥）「吉原大豆俵評判」〔江戸吉原叢刊行会編 二〇一〇c、三五六頁〕（新町〔京町二丁目〕九兵衛内八重桐〔太夫〕評）

(五七) 同右、三五七頁

(五八) 今宮鳥「吉原人たばね」〔山本内小ながと〕〔江戸吉原叢刊行会編 二〇一〇c、九〇九頁〕

(五九) 「あくたがわのみやこどりが、此きみといせやにて、人のたこの一座のとき、三浦の上らう式三人にあつかうせられ、しかられしは、あさましかりけることどもなり」〔左大臣従一威太夫〔三浦屋内〕こむらさき〕（ほんぼち氏大ぬれや茂助作・若信序「吉原下職原」〔江戸吉原叢刊行会編 二〇一〇c、二一九頁〕）

(六〇) 大ぬれや茂助 一九三七『吉原下職原』米山堂、国立国会図書

館デジタルコレクション、請求記号 304.16、インターネット公開
〔保護期間満了〕より <http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1185744>
(2018.09.29)

(六一) 評判物をめぐる訴訟や販売差止については拙稿 二〇一九に詳しく記したが、『洞房古鑑』巻之四の「遊女評判」と題する項目には『吉原草摺引』(元禄七年)、『吉原出世鑑』(宝暦四年)、『吉原花筏』(寛延二年)及び名称不明の評判物(宝暦十年)の販売が差止になったことについて記述がみえる。また『吉原草摺引』は「御仕置裁許帳 七」に判例が残されていることから、遊女評判記の販売方法が垣間みえる。これらを見るに、『吉原草摺引』の売所は「三左衛門 是ハ通旅籠町善右衛門店之者」であり、これは恐らく大伝馬町通旅籠町(三丁目・現中央区日本橋)の鱗形屋三左衛門の本屋と考えられる。また『吉原出世鑑』は通油町双紙屋小兵衛と新吉原江戸町一丁目又兵衛店彌七を売所としたとあるが、前者は恐らく丸屋小兵衛(豊仙堂)と思われる。鱗形屋も双紙屋も著名な本屋であり、吉原との関係も深い。また『吉原出世鑑』の今ひとつの売り所とされる新吉原江戸町一丁目又兵衛店彌七は、本文でも述べたとおり薬商人の大坂屋又兵衛と推察される。その他、細見『吉原花筏』及び名称不明の評判物は、吉原内で売り歩かれていたことが記されている。また、評判物は訪れた種々の客が手に取っ

たらしく、『吉原下職原』(延宝九年)には「たつときもいやし(見)きもみるものなれば、(物知)ものしりたるものにといてやくしたまへ」という記述がみえる〔江戸吉原叢刊行会編 二〇一〇c、二三〇頁〕。

(六二) 頓滴林他 一九三六『山茶やぶれ笠』米山堂、国立国会図書館デジタルコレクション、請求記号 3306、インターネット公開〔保護期間満了〕より <http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1185744> (2018.09.29)／なおこの挿絵は後の『吉原はやり小寄そうまくり』(延宝末―天和初年頃)にも取り入れられている。

(六三) 小野 一九六五b、二〇八頁

(六四) 長友 一九八三、二二頁

(六五) 同右、二六―三二頁／遊女の位および町名は『吉原三茶三幅

一対』(延宝九年)を参照した。

(六六) 作者未詳『吉原歌仙』(江戸吉原叢刊行会編 二〇一〇c、

一一四―一五頁)

(六七) 水谷隆之「解説」(吉原歌仙)〔江戸吉原叢刊行会編 二〇

一〇c、四二八頁〕

(六八) 頓滴林カ『吉原大雑書』(江戸吉原叢刊行会編 二〇一〇

b、三一七―三三三頁)

(六九) 作者未詳『美夜古物語』(小野 一九六五a、二五三頁)

(七〇) 清潔または正潔か。

- (七二) 不申共御推氏(都鳥)「吉原大豆俵評判」〔江戸吉原叢刊刊行会編 二〇一〇c、三五一―三五二頁〕
- (七二) とうらくしとんせい坊(都鳥)「吉原あくた川名寄」〔江戸吉原叢刊刊行会編 二〇一〇c、一八七頁(山本内舟橋)、一八八頁(山本内藤浪)他。]
- (七三) 今宮烏「吉原人たばね」〔江戸吉原叢刊刊行会編 二〇一〇c、八四頁〕によると、同じ兵庫屋の遊女で位は散茶。
- (七四) 同右、八五頁
- (七五) 「吉原人たばね」の細見図をみる限り、位は格子〔江戸吉原叢刊刊行会編 二〇一〇c、三五頁〕。
- (七六) とうらくしとんせい坊(都鳥)「吉原あくた川名寄」〔江戸吉原叢刊刊行会編 二〇一〇c、一七九頁〕
- (七七) 同右、一七七頁
- (七八) 同右、一七五頁
- (七九) 「吉原人たばね」の細見図をみる限り、位は太夫〔江戸吉原叢刊刊行会編 二〇一〇c、三五頁〕。
- (八〇) 「な、くさみたれ」は七草が咲き乱れる、の意か。
- (八一) 頓滝林カ「吉原大雑書」〔江戸吉原叢刊刊行会編 二〇一〇b、三三七頁〕
- (八二) とうらくしとんせい坊(都鳥)「吉原あくた川名寄」〔江戸吉原叢刊刊行会編 二〇一〇c、一八九頁〕
- (八三) 同右、一八一―一八三頁
- (八四) 今宮烏「吉原人たばね」〔江戸吉原叢刊刊行会編 二〇一〇c、九三頁〕
- (八五) 作者未詳「難波物語」〔小野 一九六五a、一四〇頁〕
- (八六) 一部抜粋すると、作者未詳「吉原天祥」(寛文七年頃)「まこといふものにあい給ふとき、わかみにつゆのま、はだへをゆるし給ふはうれしや」(新町三浦隠居内かしわき…江戸吉原叢刊刊行会編 二〇一〇a、三八七頁)／作者未詳「吉原袖鑑」〔ことに夜ふけて、とこよりわがふしとにきたり給ひ〔略〕御手つから、よるものを引きせ給わりしかたしけなき、わすられす候〕(新町久衛門内巴…江戸吉原叢刊刊行会編 二〇一〇b、一八〇頁)／ほんほち氏大ぬれや茂助「吉原下職原」〔この君と露ばかりの枕をかわせし事あり：頃日の御さかん、かげながらうれしや〕(角町中那言正三威格子桂評…江戸吉原叢刊刊行会編 二〇一〇c、二三三五頁)等。他『吉原総局』『吉原三茶三幅一對』『吉原大雑書』『吉原讀嘲記時之太鼓』『吉原人たばね』等ほとんどの評判物にこの手の記述はみえる。
- (八七) 但し都鳥などは籬で遊女を見繕うということはしていません。なっていないらしく(今宮烏「吉原人たばね」〔江戸吉原叢刊刊行会編 二〇一〇c、一〇二頁〕、ある程度遊廓に精通した後は、周囲の噂等で評判物を記す場合もあったと考えられる。

(八八) この点については宮本 一九九一、六七頁の指摘による。宮本は「そうした意味では評判記の作者、ひいては版元が遊廓関係者に対して繁昌を左右する功を持っていたものと思われる」と指摘している。

参考文献

- 江戸吉原叢刊行会編 二〇一〇a 『江戸吉原叢刊 第一巻』八木書店
二〇一〇b 『江戸吉原叢刊 第二巻』八木書店
二〇一〇c 『江戸吉原叢刊 第三巻』八木書店
- 小野晋 一九六五a 『近世初期遊女評判記集(本文篇)』古典文庫
一九六五b 『近世初期遊女評判記集(研究篇)』古典文庫
- 柏崎順子 二〇一〇『鱗形屋』(『言語文化』四七)
- 近世文学書誌研究会編 一九七九『近世文学資料類従 仮名草子編三
六 遊女評判記集(下)』
- 高木まどか 二〇一六『遊廓に連れ立つ男たち』(『女性学年報』三七)
二〇一九『出版統制と遊女評判記—貞享・元禄以降の販売差止例と記述内容の変化をめぐって』(『日本常民文化紀要』三四)
- 暉峻康隆 一九五三『初期遊女評判記研究』(『西鶴研究ノート』中

央公論社)

長友千代治 一九八三『初版一九八二』『近世貸本屋の研究』東京堂

出版

中野三敏 一九六二『遊女評判記研究—西鶴文学の一基盤—』(『近

世文芸』八)

一九六四『遊女評判記と遊里案内』(『国文学』九二)

一九八五『江戸名物評判記案内』岩波書店

野間光辰 一九四〇『浮世草子の成立』上・下(『国語国文』一〇、

一一、一二、後に一九四八『西鶴新攷』筑摩書房所収、

引用・頁数は『西鶴新攷』に依る)

野間光辰解説 一九五七『難波鉦附返答古銀買』古典文庫

宮本由紀子 一九九一『遊女評判記』について』(『地方史研究』四

一六)

宮川曼魚 一九二七『江戸売笑記』批評社

謝辞…本研究はJSPS科研費JP17J05630の助成を受け
たものです。

【表】延宝期前後（寛文～天和）吉原評判物

No	作成年	月	表題	作者	作者詳細	板元	備考
1	寛文7 1667	3月頃	吉原講義記時之大 較（再刻）	吹上氏かわずのすけ安方	「たまたまこれきれき衆の末座につらなつて（勝）やぶれらいこの身なれば」、「あけや町に二三年ほうかうして（勝）もとよりなにもしらぬあおものやの身身すきなれば」 ²⁾	江戸うろこかたや 加兵衛	初版寛文4頃、「吉原根元記」（寛文6・伝存未詳）への返答
2	寛文8 1668	5月中旬	吉原よぶこ鳥	不明（「店主」と呼ばれる大尽客の取巻き）	「吉原雑舞」の作者と同一カ。 協力者：伝三	江戸うろこかたや 加兵衛	
3	寛文7頃 1667		吉原天祥	不明	「いなかのやでんよりも、はるばるとはじめてこの花のお江戸へ上りつつ」 ³⁾ 、松前から百里の地に住む	不明	
4	寛文10- 延宝初頃 1670- 1673		吉原柳かゝみ （再刻）	不明（「吉原よぶこ鳥」の作者と同一カ） ⁴⁾	未詳	不明	「吉原丸撰」（寛文12）「吉原くらべもの」（寛文夫延宝初頃）への返答
5	延宝2 1674	2月中旬	吉原失墜	富士屋吉連、油虫朝臣瀧高氏勲太郎、頓藏朝臣まぐくべ氏十六郎	富士屋吉連…油虫	大伝馬三丁目山本 丸左衛門	「徒然草」注釈本に模したものの。用語等で、遊女の評判は僅か。
6	延宝3 1675	孟春	吉原扇雑舞	家溝、信正、庚寅		堺町板木や七郎兵衛 衛間	
7	延宝3 1675	4月中旬	吉原大雑書	柳瀧林（山茶やおれ笠」と同一）作カ、菱川師宣画カ		堺町菊屋七郎兵衛 カ	
8	延宝3 1675	夏至	山茶やおれ笠	小石河住山水氏柳瀧林作、菱川師宣画カ	それなりの教養あり	堺町菊屋七郎兵衛	
9	延宝8 1680	秋以後	山茶評判吉原歌仙 （仮題）	不明		不明	
10	延宝8 1680	秋頃	吉原人たばね	新作者今宮からす（二番町乃住人新作者おもわれぶり氏いやいやや与作・霞々問住人そこから主馬藏）	「われわれも其むかし、けいせいをかこかい、つめを取、およそゆひをきらせし太刀とりにもなりて」 ⁵⁾ 、「御身世俗の恥んまとして、太夫かうしをしらす」 ⁶⁾ 。	不明	

11	延宝 9	1681	正月頃	吉原あくた川名寄	あさちか原かうけつむあん せんしやう山とうらくしと んせい坊 (あさちか原角田 川の住人御息)	協力者多数	江戸通油町かめや 彦右衛門	「吉原人たばね」への 返答
12	延宝 9	1681	孟春	吉原三茶三幡一対	玉門寺隠居		江戸升屋	
13	延宝 9	1681	3月上旬	吉原下職原	米河岸之住人はんぼち氏大 ぬれや戻助作、若信序		江戸さうしや権左 衛門	
14	天和 2	1682	正月	吉原買もの調	四方六千人		不明	
15	天和 3	1683	初夏	吉原大豆俵評判	不申共御推氏 (御息)		不明	
16	貞享 3	1686	4月頃	吉原番でんどうじ	浅草住不長御序		不明	
17	貞享 4	1687	9月	吉原源氏五十四巻	四国太郎 (宝井 (瘦本) 其 角) 作、菱川師宣画	其角 (1661-1707) は江戸時代中期の俳 人、吉原で豪遊した紀伊国屋文左衛門 に俳諧を教えた	(写本のみ伝存)	

※繰り返し記号は仮名になおす、常用漢字にする等の変更を行った

¹ 吹上氏かわすのすけ安方作「吉原謙囃記時之大概」(江戸吉原叢刊行会編 二〇一〇a、二五一頁)

² 同上、二五二頁

³ 作者未詳「吉原天科」(江戸吉原叢刊行会編 二〇一〇a、三九〇頁)

⁴ 稲葉有祐「解題」(吉原よぶこ島) (江戸吉原叢刊行会編 二〇一〇a、四九六頁)

⁵ 今宮島「吉原人たばね」(江戸吉原叢刊行会編 二〇一〇c、一〇六頁)

⁶ とうらくしとんせい坊 (御息)「吉原あくた川名寄」(江戸吉原叢刊行会編 二〇一〇c、一七七頁)